



特集 平尾邦雄先生 追悼

平尾邦雄先生，ありがとうございました

ISAS ニュース編集委員長 村上 浩

2009年2月13日、平尾邦雄先生が逝去されました。平尾先生は、日本の宇宙開発の初期より、開発が進むロケットを実際に科学観測に適用する面を推し進められた、宇宙科学の先達のお一人です。ハレー彗星探査ミッションを牽引されていた先生が定年退官されたころ、私はまだ宇宙科学研究所（当時）に赴任していませんでしたので、残念ながら現役時代の平尾先生から直接ご指導を受けたことはありません。そんな私が今回の特集号の巻頭の言葉を書かせていただくのは大変僥越ですが、これは平尾先生にはもう一つの顔があったことによります。現在私が編集委員長を務めているこの『ISAS ニュース』の初代編集長、生みの親が平尾先生なのです。

ISAS ニュースは、現在のJAXA 宇宙科学研究本部の前身、文部省宇宙科学研究所が全国の大学の共同利用研究所として発足した1981年4月に誕生しました。創刊号では、東京大学宇宙航空研究所時代最後の人工衛星「ひのとり」の打上げ風景が

表紙を飾り、研究所長であった森大吉郎先生のあいさつなどに続いて、平尾先生によるISAS ニュースの紹介記事が載せられています。研究所に集う全国の研究者間の相互交流、そして一般の方々への宇宙科学の浸透を狙って、研究者自身が執筆・編集を行うユニークな広報誌の誕生でした。宇宙科学を推進する現場の人間が自ら情報を発信するISAS ニュースの重要性は現在も変わっていません。

平尾先生は、ISAS ニュース編集委員会の新年会を毎年楽しみにされ、いつもにこやかなお顔を見せていただきました。しかし残念ながら2009年の新年会には、すでに体調を崩されており、お会いいただけませんでした。お元気なうちにお目にかかる機会をつくっておくのだった、というのが編集委員会一同の思いです。平尾先生がつくられたISAS ニュースを、時代に合った、さらに魅力的なものにしていきたいという思いを強くするとともに、先生のご冥福を心よりお祈りしたいと思います。

（むらかみ・ひろし）

平尾先生、 ありがとうございました

向井利典

駒場にあった東京大学宇宙航空研究所の平尾研究室の助手に採用されたのは1968年4月、平尾先生はまだ40代半ばだった。その年の6月、COSPAR（宇宙空間研究委員会）が大手町の経団連会館で開かれた。平尾先生は組織委員会の幹事として現場の指揮を執っておられ、当然ながら私も手伝いに引っ張り出された。修士課程を出たばかりで、本当は何も分かっていなかったと思うが、手伝いの合間にセッションに出て高名な外国人研究者の講演を聞いて面白がっていた記憶だけが残っている。

まさに日本の宇宙科学の黎明期だった。1970年、日本初の人工衛星「おおすみ」の打上げに成功し、その後、Mロケットと科学衛星の能力向上が相まって日本の宇宙科学は日の出の勢いで大きく発展したが、その草創期の20年間、平尾先生は小田稔先生や大林辰蔵先生らとともに宇宙科学グループの牽引役であった。

特に、1985年から翌年にかけての国際的なハレー彗星探査において、宇宙研の「さきがけ」と「すいせい」が世界的な業績を挙げることに成功したのは、平尾先生のリーダーシップによるところが大きかったのは周知のことである。これらの成功

の陰でさまざまな苦勞や喜びを分かち合いながら、先生のお膝元で研究・仕事をさせていただいたことは、私の研究者としての大きな糧になったと思っている。

平尾先生はロケットや衛星の現場仕事が大変好きで、試験が始まると連日のように発生する大小さまざまなトラブルへの対処は先生の独壇場だった。あるとき、電波干渉の問題で皆がお手上げ状態になったことがあり、しばらく見ていた先生が「シールドのここでグラントを取れ」という指示を出され、干渉が激減したことがあった。そのとき「平尾先生には電波が見えるのか」と言った人がいた。もちろん冗談だが、たぶん電波の波長から腹・節の場所を推測されたのだろう。実験データを見て何をどのように考えるのか、具体的に教えられたという記憶はないが、私の実験屋としての見方や考え方についての基礎は、先生の言動を見て、そして先生とのディスカッションを通じて培われたと思っている。

また、「宇宙研は共同利用研なんだよ」という言葉にハッとした記憶がある。それが何についてのことだったのかは忘れてしまったが、この一言だけは妙にずっと頭の片隅に残っていて、その後の私の言動のもとになっているような気がする。

先生は数々の国際協力を推進され、そのほとんどを成功させたが、私が深く関与した衛星はIMS（国際磁気圏研究）の一翼を担ったオーロラ観測衛星「きょっこう」が最初であった。いろんな思い出があるが、このオーロラ観測を主目的とする衛星運用のための可搬型送受信機をカナダ東部のハドソン湾縁のFort Churchillに設置したときのことである。この出張とあわせて、カナダの観測ロケット実験に電子温度プローブと低エネルギー電子計測器を搭載した。私が開発した後者は手持ちで行けるようなものではなかったためコンテナで送ったが、電子温度プローブは平尾先生の手荷物に入れて出掛けた。私は入国審査、税関をすつと通過したのだが、平尾先生はなかなか出てこない。外国の経験がほとんどなかった私は非常な不安に駆られたが、動くに動けず、乗り継ぎ便の出発時刻が迫ってきたころ、ようやく平尾先生が現れた。税関で荷物を開けさせられ、電子温度プローブの説明に手間取ったと鼻をひくひくさせながら怒っていたのを覚えているが、きつとやかに軽量で高性能かを講釈していたに違いない。

圧巻は何といてもハレー彗星探査における国際協力。当時、宇宙科学を推進している米国NASAやソ連IKI、ヨーロッパのESAを相手に宇宙研も加わり、IACG（宇宙科学関係機関連絡協議会）という枠組みがつくられたが、宇宙研がスケールのまったく違うこれらの外国宇宙機関と対等な関係を築き上げられたことは、まったくもって平尾先生のお人柄と信頼感“TRUST”以外の何物でもなかったであろう。

先生は車と宇宙研、内之浦が大変好きだった。退官後も時々車で宇宙研に来て昔と変わらぬ豪快な笑い声を飛ばしていたが、いつだったか「先生、車の運転はさすがにそろそろおやめになる方がいいのではないですか」と言ったところ、「君までそんなことを言うのか」などおっしゃっていたのが、つい昨日のことのように感じられる。しかし、倒れる直前のお正月まで運転されていたとは、案外、平尾先生らしい最期かもしれない。

内之浦といえば、平尾先生はこれまで内之浦から打ち上げられた科学衛星をすべて現地で見たと経験を持つ稀有の存在である。M-V型ロケットは2年半前の太陽観測衛星「ひので」の打上げ成功をもって終わり、これから次期固体ロケットの開発に着手しようというところで、2～3年後にはこのロケットで小型科学衛星初号機を上げる計画である。それを見届けられないことは平尾先生としても本当に残念であったと思うが、天国から成功を見守っていただけのものと感じている。

平尾先生、長い間、本当にありがとうございました。
(むかい・としふみ)



カナダFort Churchillにて。中央で日加の国旗を持っているのが平尾先生、右から2人目が筆者。背後はオーロラ観測衛星「きょっこう」の可搬型送受信機。

追憶の断章

畚野信義

奈良の生家にいた2月のある日、ふとあるメールを開いた。普通ならそのまま捨てる種類のものだった。虫の知らせだったのか。平尾さんの葬儀を伝えるものだった。しかしその日は、4月から理事を引き受ける奈良先端科学技術大学院大学の打ち合わせが予定されていた。

平尾さんと最初に会ったのは1960年の秋だった。狸穴の郵政省へ面接に行くときに乗せられ、小金井の電波研究所へ連れていかれた。見せてもらった研究室の一つの室長が平尾さん(当時38歳)だった。実験室のガラス細工と、ぎこちなくネクタイを結んだワイシャツの上に作業着を着た室長の姿だけが記憶に残っている。大学の定員が増える前、神武景気で官民格差が2~3倍に達しており、工学系公務員は未曾有の求人難だった。所長がビールを注いで「何をやりたいですか」と猫なで声で聞く時代だった。「何か新しいことをやりたい」と言うと、電離気体研究室に配属された。K-8型ロケットが実用化され、電離層の観測が本格化したころだった。翌年春、郵政省に入省し、研修が終わった連休明けに高田馬場の寮から小金井の電波研へ10時過ぎに初出勤した。平尾さんは室員全員(うち一人が宮崎さん)とソファで仕事前のお茶を飲みながら、スポーツ新聞を開き野球談議に熱中していた。平和な時代だった。

7月に、秋田へロケット実験に行った。観測所(秋田駅裏)と道川海岸にある実験場との連絡に、運転免許を持っていた私が観測所の車を使うことを、平尾さんはうらやましがった。バスに乗ると一番前に座り、運転手の一挙一動を食い入るように見て終点まで乗り過ごしてしまうこともあったという車好きで、好奇心満点で何にでも夢中になる人だった。

翌年2月には10万円(室員各2万5000円)でポンコツライトバンを買った。電波研では所長車(ビューイック)を除いて3台目の車だった。後のスペースモータースの発足だった。橙と黄のツートンカラーで、三菱水銀灯と大きく書かれていた。電波研構

内で塗装を削り重ね塗りして、2週間ほどでグリーンのパステルカラーに仕上げた。5月の実験に道川へ乗り付けようと張り切っていた平尾さんだが、NASAとの共同実験が入り、泣く泣くワロップス島へ出掛けた。秋田へは室員3人で行ったがK-8-10号機が失敗し、この車はその後二度と道川へ行くことがなかった。

秋から内之浦での実験が始まった。車で行くしか選択肢はなかった。国道1号線は全線舗装されていたが、2号線で50%程度、3号線では町の中だけだった。前の車が立てたモウモウたる土煙の中、大荒れの海を渡る小舟のような状態がずっと続き、運ちゃん食堂で食事を取り、後ろに併設されたジメジメした布団の仮眠所で短時間休み、交代で運転して走り続けた。熊本県と鹿児島県の間には三太郎峠(赤松太郎、佐敷太郎、津奈木太郎)という難所があり、曲がりくねった急坂の狭い道を大型トラックが走り、むき出しの石で車の底をガンガン擦った。内之浦では、東京の車は傷んでいないといって、この車を15万円で買いたいという人が現れた。平尾さんはそれを断り、帰りは東回りの10号線を行ったが、宮崎県と大分県の県境に宗太郎峠という難所が待ち受けていたのだった。

平尾さんが東京大学宇宙航空研究所へ移ってすぐのころ、大阪で学会があった。義弟のついでで念願の車(パブリカ)を下取り価格で買い、二人で東京へ乗って帰った。浜松辺りで深夜になり、ホテルのネオンを見つけた。部屋に案内されると、布団がピンクとブルー。ラブホテルであったかと気が付き、顔を見合わせて苦笑いした。平尾さんは、あのパブリカをずいぶん長く大事に使ってくれた。平尾さんの追憶には車の話がふさわしい。向井君によると、最後まで運転していたそうである。

飾らない大らかな人だった。上司として平尾さんは自由に何でもやらせてくれ、ニコニコと見守ってくれた。兄貴のような存在だった。平尾さんが宇宙研へ移ったときは、随いていくかどうかで2年ほどもゴタゴタし、結局、電波研所長の強硬な反対でつぶれ、ずいぶん迷惑を掛けたが、その後も温かく面倒を見てもらった。あるとき、内之浦の実験場で大家君が「おまえが何を言っても平尾さんは怒らない。いいなあ」と私に言ったことがある。最初に平尾さんのところに入って本当に運が良かった。今の私があるのは平尾さんのおかげだと心から思っている。亡くなる2年ほど前、横浜駅の近くで小山、向井君と4人で呑んだのが最後だった。元気でニコニコしていた。まさかと思った。しかし平尾さんらしい最期だったと思う。

(ふごの・のぶよし)

1961年7月、電波研究所平尾研究室(6人中3人)。右から平尾先生、宮崎先生、筆者。当時の国研の研究室の雰囲気が出ている。



平尾邦雄—— 電離圏ロケット衛星観測の大先達

宮崎 茂

人生は偶然の織り成す阿弥陀籤

「思い出が走馬燈のようによみがえる」という有名な言い回しに倣って二、三書いてみたい。平尾邦雄先生との初対面は1959年、私が電離層観測の研究のために出向していた電気通信研究所の高山一男 放電プラズマ研究室であった。

当時よく流れていた威勢のいい元気な曲、デキシードジャズの「世界は日の出を待っている」というフレーズは、夢と希望に満ちて、世界は「宇宙への挑戦の時代」であったと思う。日本でも糸川英夫先生、永田武先生、前田憲一先生の「観測ロケット計画によって宇宙科学・工学や電気通信工学は革命的な進展を見ることは間違いない」という確信に満ちた計画の一部として、私どもの電離層観測プロジェクトが始まった。また当時の電波研究所 青野雄一郎次長、電気通信研究所 一宮虎雄次長の学識と積極的な推進力も忘れることはできない。

ビギナーズラック～電離層観測成功の連続～

秋田ロケット実験場でK-8型ロケットが高度約200kmに達するようになって、最初から本格的電離層観測を目指し見事なスタートを切った。

1960年、K-8-3号機で世界初の昼間のイオン密度測定、続いてK-8-4号機で夜間のイオン密度測定に成功し、世界で初めて電離層の明瞭な時間的成長過程が実験的に観測された。またK-8-6号機においてスボラディックE層の極めて薄い層が明瞭に観測されたのも、世界初であった。そして、電子密度測定器レゾナンスプローブが実験室の場合と同じく電離層プラズマでも正確に再現され、プラズマ現象が明確になった。これらは日本発のテーマとして世界で広く研究された。まさに成功の連続で、ビギナーズラックでもあった。秋田で

の7回の観測による期待を上回る素晴らしい成果は特筆大書に値する。この成功は、横河電機の精密測定技術にも負うところが大きい。ロケット以外の不具合で観測が不能の場合でも、全号機の電離層観測器はほぼ完璧に作動していることが、それを示している。

しかし1962年、K-8-10号機の事故によって秋田ロケット実験場での観測は終わった。このとき、平尾先生は米国とのAerobeeロケット共同観測実験でワロップス島へ出掛けられ、その間私が電離層班のチーフを務めたのだが、平尾先生が「ツキ」をワロップス島へ持って行ってしまい、秋田には「ツキ」が残っていなかった。

我が国初のスペースプラズマチェンバ完成
(平尾研究室)

ロケットによる電離層プラズマ直接観測の計画が立てられたとき、どのように測定するか、測定器をどう開発するか、また測定対象に適した素性の良いプラズマをいかにして安定につくるかが、最初の課題であった。最初に試みたのは、放電実験に使われるガラス製真空管タイプのプラズマ放電管であった。しかし、これは製作が難しくかつ歩留まりも悪い。しかも実験を行うと、最良のコンディションは長くて1週間であり、後は劣化し不安定になってしまう。

よって、いかにして確実に安定なプラズマをつくるかが最大の問題であった。当時、真空技術の急速な発達により大型の高真空容器ができるようになったので、1960年、当時最大のステンレス製円筒形の大型装置(内径1.2m、長さ1m)をつくった。これが我が国でのスペースプラズマチェンバ第1号である。その後、東京大学宇宙航空研究所などでも続々と製作された。

平尾先生像

先生の「人生に三楽あり」をもじれば、「酒、パイプ、自動車ドライブ」だろうか。また常にオープン・マインドであり、行動力の人、ハードウエアにめっぽう強い人でもある。

さて、現代はある意味で「数学化する世界」であり、その源泉は「数学化する科学」でもある。科学が進歩するには「数学が最大・最強の武器」に異論はないが、アインシュタインが述べているように、「数学の法則で自然を表そうとしても、決して正確に表すことはできない。また、どんなに正確な法則であっても、現実とはかけ離れている」。宇宙の深奥を探るためには、数学を超える「センス・行動力」も必要であろう。宇宙は無限であり、いつでも「世界は挑戦者を待っている」と、平尾先生は言うに違いない。

——先達の宇宙へ翔ける科学旅——

(みやざき・しげる)



1963年、米国イリノイ大学にて。右から平尾先生、高山先生、筆者。

インドロケット実験と平尾先生

小山孝一郎

1971年にインドとのロケット実験が始まりました。最初の実験では、日本側からは電子密度を測定するインピーダンスプローブと小型化された電子温度測定器を、先方のシャストリ博士の磁力計とともに搭載することになっていました。平尾先生の後について、大林先生、江尻さん（元 国立極地研究所教授）、明星電気㈱の八巻さん、松栄電子㈱の田村さん、そして私を入れて合計6人の実験班でした。この時に、いかに輸出が大変かを悟りました。何しろ二つの測定器から始めて、補助部品のコンデンサー、抵抗、ほかの工具に至るまですべてリストアップして、インド側の通関に備えねばなりません。2個か3個だったか記憶が定かではありませんが、とにかく金属製コンテナに入れ、当時マドラス（今はチェンナイと名前が変わっています）に空輸しました。ところがマドラスに着くと、国内航空会社

る値に落ち着きました。平尾先生の鶏肉嫌いは、ここに始まったのかもしれませんが。

ある夜、トリバンドラムから車で約1時間の距離にあるコバラムビーチのホテルに泊まっておられたインド宇宙開発の父、ビクラム・サラバイ博士に招待されました。平尾先生と大林先生がお相手され、私たち若い4人は出された食事を黙々と食べるだけでした。肉、魚を使わないベジタリアンの食事でしたが、今でも思い出すぐらいおいしいものでした。サラバイ博士のお顔を拝したのは、それが初めて最後でした。その年の12月31日、サラバイ博士が同じホテルで亡くなられたとの知らせが日本に届きました。2年ほど前に、アジア太平洋地域宇宙科学技術教育センターのアドバイザーコミッティーのメンバーとしてコバラムビーチを訪れました。実験期間の合間を利用して水遊びした当時を思い、サラバイ博士を偲びました。

当時インドは、ようやく宇宙開発を始めたばかりでした。観測ロケットは、フランスのセントール・ロケットのデッドコピーを作り始めていましたが、我々は米国が提供したミサイル、ナイキアパッチを使いました。ナイキアパッチの加速度は100G、スピンは6Hzでした。開頭コーンは日本ほど精密でなく、こちら側から反対側のすき間が見えるぐらいでした。このあたりは平尾先生が助言されて、少なくとも反対側が透けて見えることはなくなりました。

1回目のロケット実験はテレメータが途絶えて失敗し、2機目は特にテレメータの配線などを徹底的に見直して成功しました。打上げ角は87度ぐらいと記憶しています。打ち上げてしばらくすると、沖に水しぶきが上がりました。得られたデータは38年を過ぎた現在でも、赤道エレクトロジェット電流の中の温度を測定した唯一のものです。当時一緒に働いたインド側の技術者の中には、インド宇宙研究機構（ISRO）前議長のナイア氏、前大統領のカラム氏がおられます。2年ほど前にISROを表敬訪問したとき、ナイア氏は握手をしながら「あのころが一番楽しかった」と私の耳元にささやかれました。この実験で、輸出の方法、官庁とのやりとりなどを含めて、国際協力のやり方、気配りなど、多くの事を学びました。平尾先生の真似をやりだしたのは、自分がそういう立場になってからです。

平尾先生の訃報を聞いたのは、偶然にも私が日本に一時帰国していたときでありました。平尾先生はそのお亡くなりになるまで、私に余計な旅費の心配をさせまいと、死に時を選ばれたのではないかという気がしております。

（おやま・こういちろう）



2回目のロケット実験。左から明星電気㈱阿部氏、江尻氏（当時宇宙研）、インド国立物理研究所ソマヤジュル博士、平尾先生、等松先生（当時東大）。写真提供：元松栄電子㈱田村氏

のストライキにぶつかりました。やむなくここで1泊です。マドラスでの夜は日本領事館に招かれ、ご馳走になりました。これは外務省に事前の連絡を平尾先生がしておられたからで、国際協力をやる時はこういう気配りが必要とおぼろげながら記憶にとどめていました。次の日はコンテナとともに目的地のトリバンドラムまで、丸1日の汽車旅行です。列車の天井には古ぼけた扇風機、布団などまったくありませんし寝台もなく、座ったまま、まどろむぐらいでした。

トリバンドラムでは街一番といわれるいいホテルに泊まりましたが、それでもシャワーの水は赤茶け、おまけに冷たい。その後、現在のビクラム・サラバイ宇宙センターの中のゲストハウスに移りました。食事は1日3回コックさんが作ってくれましたが、まず鶏の肉が硬いことには閉口しましたし、辛いものにも参りました。平尾先生がコックに交渉してもう少し唐辛子の量を減らしてくれと言ってもまだ辛く、3回ぐらいの折衝でようやく我々が食べられ

平尾先生とともに

大家 寛

私が最初に平尾先生にお会いしたのは、秋田県道川海岸、東京大学生産技術研究所のロケット実験場でした。1961年6月に実施されたK-87号機ロケット実験のときで、私は修士課程を修了して助手になったばかりでしたから24歳、平尾先生は30代後半のころだったでしょうか。勇ましいロケット観測戦士の雰囲気第一印象でした。電波研究所で研究室長として活躍されていて、電波研に入った私の京都大学時代の同級生、畚野さんと一緒でした。以来、最後はハレー彗星探査まで25年にわたって、平尾先生とは科学者年齢としては完全に一世代後の若輩がこう言うのは失礼かもしれませんが、宇宙観測を中心舞台としてずっと共に歩ませていただきました。

印象深く思い出されるのは、東大宇宙航空研究所誕生の前後です。まだ青年の意気をみなぎらせていた平尾先生は、我が国に飛翔体を手掛ける研究所が誕生する潮流の中で、張り切っておられました。体制は日本学術会議の勧告を受け宇宙航空研究所の設立に向けて始動したのですが、永田武先生が中心になり、糸川英夫、前田憲一といった先生たちが当時の文部省と設立に関する折衝に当たっておられたのではないかと、若輩の私は遠巻きに感じているのみでした。ある会議で平尾先生は激しく永田先生に抗議しておられました。「旧東大航空研究所と抱き合わせで宇宙工学・科学の研究所をつくらうなどの文部省の考えは、まったく受け入れられない。とんでもないことである」と。しかし永田先生の答えは、「文

部省は、今研究所をつくらずパスしたら、永久につくらないと言っている」というものでした。

こうして妥協を背負って共同利用研究所として東大宇宙航空研究所が1964年に誕生したのですが、その結果、「宇宙科学御三家」と誰からともなく称される三つの研究グループが誕生しました。言うまでもなく、小田、平尾、大林の各グループです。平尾先生が着任されるまでには、ずいぶん時間がかかりました。電波研では平尾先生をお出しすることまかりならぬ、となったのです。そのころのこと、平尾先生が電波研所長を怒らせないよう時間をかけて説得する様子を、当時、平尾先生が一番頼りになさっていた京都大学教授の前田先生に語っておられました。余談ですが、お二人は酒の席も、観測ロケットの打上げ待ちのときも、一見たわいなおふざけを言い合って、大変気心が通じておられる感じを受けていました。その点、私が師と仰いだ、芯がまじめな大林先生とは違うタイプでした。

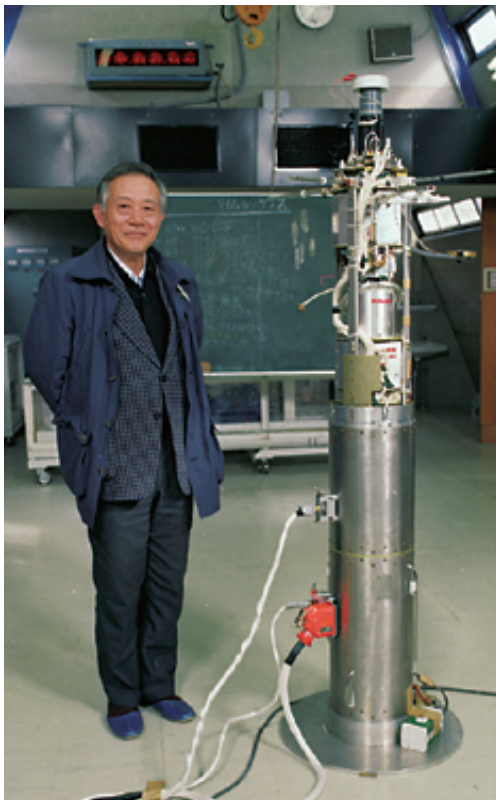
平尾先生を語らせていただくのに、内之浦のロケット・衛星観測の現場のことを抜きにしては、偽りになりましょう。先生は実際に手足を動かして実験現場の諸事の進行にかかわるのが大好きでした。ロケット打上げにはさまざまな細事が不可欠ですが、そのどれもおろそかにしない、という点で重要な貢献をされていました。その具体的現れの一つが、天気係として実験スケジュールの調整に一役買っておられたことで、内之浦はご自身の庭のように丸ごと愛していました。

栄光の中にあられた先生も、電離層電子密度測定器、レゾナンスプローブの件は、学問的には不本意だったのではないかと思います。平尾先生が中心に進められたレゾナンスプローブは高山効果をロケット実験に応用したのですが、後に、高山効果がプラズマ振動でなくシース共鳴現象で、電子密度は出ないと判明したのです。電気通信研究所におられた高山先生がラングミュアプローブに高周波を加えると共鳴現象が起きると発表したとき、日本大学の市川教授を主とする理論派たちがたちどころに、共鳴点はプラズマ振動に決まっていると簡単に決め付けたのが、そもそもの事の起こりだったのです。

小まめに具体的に作業をするのを好んだ平尾先生は、レゾナンスプローブ事件後は神戸大学のグループが高圧放電事故でつまずいたエネルギー粒子計測器の再興に向かい、どちらかといえば波動観測に偏りがちだった我が国の宇宙空間観測に粒子計測の道を探りました。それらは続く世代に引き継がれ、例えば宇宙研究で日米協力の手本となったGEOTAILミッションのように、国際協同研究の場で活躍しています。

(おおよ・ひろし)

平尾先生が大好きだったK-9M型ロケットの頭胴部のそばで。



平尾さんの思い出

西村 純

平尾さんがお亡くなりになって、もう1年近くの月日がたったと思うと、時の過ぎ行くのがあまりにも早く、寂しい気持ちにとらわれます。日本のロケット、人工衛星開発の初期の段階で、驚くべき発展をもたらされた先輩が一人去り二人去り、ここにまた平尾さんが逝去されたことは、私たちにとって何よりも心の痛むことです。あんなにお元気だったのにと、残念な気持ちに襲われてしまいます。

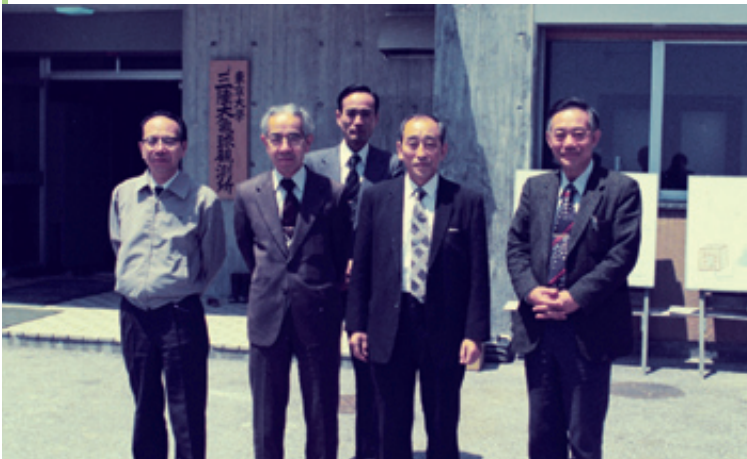
平尾さんはご退官後も宇宙研の忘年会などには欠かさずお見えになり、後輩を励ましておられました。宇宙研と関係の深い(財)宇宙科学振興会の会議にもおいでになって、時にはやや辛口の質問をされて、こちらが返答にちょっと窮するのを見て楽しんでおられるようでした。

初めてお会いしたのは、平尾さんがまだ電波研究所におられるころ、国際地球観測年で観測ロケットが秋田県道川で打ち上げられて、電離層の観測で素晴らしい成果を挙げておられたころでした。もう50年も前のことです。実験に対して素晴らしいセンスと独創性を発揮しておられました。成果が挙がるにつれて、宇宙科学の研究所をつくりたいという要望が各方面で高まり、日本学術会議の宇宙空間研究連絡委員会で議論されていました。

ちょうど敗戦後の荒廃から立ち直り、日本の科学が新たな体制を取って発展しようとしていた重要な時期でした。宇宙科学の研究所のあるべき体制についても強い意見を持ち、常に正論を述べる若い科学者がいて、それが平尾さんでした。

やがてこの提案が実り、東京大学の中に共同利用研究所としての宇宙航空研究所が創設され、日本の科学衛星が生まれ、ハレー彗星ミッションが成功します。その中にあって平尾さんは、いつも工学のグループと協力してこのユニークな宇宙科学の集団を組織し、率いていかれました。ご自身の研究成果も、国際的に優れた科学者として、数々の賞を受けておられました。

三陸大気球観測所を訪れた(右から)平尾先生、曾田元宇宙航空研究所長、秋元さん、宮崎理化学研究所副理事長、筆者(1977年)。この2年後に平尾先生の気球実験が行われた。



日本の宇宙科学はその後も大きな発展を遂げ、イギリスの科学雑誌『Nature』に世界で最も優れた研究所として紹介されるまで成長する原動力となったのは、パイオニアとしての平尾さんのお力が大きかったことを思い起こさずにはいられません。

国内では日本地球電磁気学会の会長を、また国際的にはCOSPAR(宇宙空間研究委員会)の日本代表を長らく務め、後輩を育て、我が国の成果を海外に発信し、国際協力の発展に尽くしてこられました。

私の個人的な懐かしい思い出は、できて数年を経た三陸の大気球観測所で、平尾さんが気球観測をされたときのことです。パイプをくゆらせながら楽しそうに観測器を組み立てられ、私も気球の打上げでお手伝いをしていました。観測は成功裏に終わり、しかし気球から切り離れた観測器は落下傘が開かず、悲鳴のようなテレメータの受信音とともに落下。近くの河原に落ちたらしい、探しに行こうと、平尾さんが先頭に立たれて真夜中に出掛けました。やがて川岸に点滅する光を見つけ、観測器に取り付けた点滅灯と思い近寄ってみると、それは夜釣りをしていた人の明かりでした。真夜中のこと、相手は飛び上がって驚き、平尾さんを筆頭に一同、平謝りに謝りました。ここで観測器が無事回収できていたら、平尾さんは懲りずにその後も気球実験に付き合っていたことでしょう。

東京大学を離れて共同利用機関としての宇宙科学研究所が生まれたとき、平尾さんは一般の方々に宇宙科学を理解していただくことの必要性を強く主張され、『ISASニュース』という広報誌をつくられました。初めのころ、「君、気球のこと書けよ」とニコニコ笑いながら原稿の依頼があり、東シナ海を横断する日中大洋横断気球の計画について書いたことを、昨日のように思い出します。編集にはずいぶん力を注がれて、ISASニュースは宇宙科学を発展させるための素晴らしい広報誌として定着することになりました。創刊以来30年近くを経て、今も皆さんに親しまれています。

平尾さんについての思い出は尽きることがありません。宇宙科学の在り方について論争をしたり、怒られたり。この50年にわたって、宇宙科学の発展と国際協力を築いてこられたことに、深い感謝の意を捧げずにはいられません。平尾さんとの素晴らしい思い出は、我々の心の中にいつまでもとどまって消えることはないでしょう。

この分野の発展に一生を捧げてこられた平尾さんに感謝の念を捧げるとともに、ご冥福とご家族のご健勝をお祈りするばかりです。

(にしむら・じゅん)

平尾先生の思い出

林 友直

糸川先生による固体ロケットの開発は、1954年に東京大学生産技術研究所で開始された。その後10年の間に性能は着実に向上して、日本最初の人工衛星も夢ではないという情勢になり、開発の本拠としての東大宇宙航空研究所が駒場に発足することとなった。当時私は、本郷の電子工学科に在籍してマイクロ波や荷電ビーム装置について学んでいたが、宇宙についてはまったくの素人であった。宇宙研が発足したら駒場へ異動することに決まっていたので、あらかじめ宇宙の基礎知識はわきまえておくべきであるという電気の岡村先生のお考えで、当時小金井にあった電波研究所で宇宙観測の先導役を担っておられた平尾先生をお訪ねするよう取り計らってくださいました。

実験室に伺ったのは1964年のことで、これが平尾先生との長いお付き合いの初めである。平尾先生は、ロケット実験初期のころから電離層の直接観測を目指してセンサーの開発に取り組んでおられたが、その日も実験室ではプラズマの電子温度測定用プローブの実験中であつた。それまでは地上から出した電波の反射を利用することによってしか探ることができな

かった電離層の中にロケットを打ち込んで、電離層プラズマ諸量を直接測定するというものである。初めて目にする装置についての懇切なご説明に心躍る思いがした。

私自身が駒場に通うようになって間もなく平尾先生も正式に宇宙研に赴任され、同じキャンパスの住人となった。それ以来ロケットの設計会議、ロケットや衛星に搭載する機器の環境試験、鹿児島県内之浦実験場など、至る所でのお付き合いが始まる。

当時駒場の実験室は風洞の脇にあった木造の27号館で、そこに平尾先生や大林先生が居室と研究室を構えておられたので、隣近所のお付き合いとなった。双方の研究室の若手も幸いにして有無相通じて仲良く仕事を進め、誠に良い環境ができた。

平尾先生は車の運転がお好きで、ガムテープで補修された愛車に、私も帰りがけによく乗せていただいたものである。その車はしばしば27号館の脇に止まり、窓から出たコードでバッテリーの充電をしておられた。あれは電気自動車だ、などとちやかす連中もいた。

内之浦でのロケット打上げに当たって、平尾先生

はご自身の実験準備作業のほかに、打上げ計画に大切な気象予報も担当された。東大地球物理学科では気象学も学んだはずだからということをお願いしたらしいが、当時、短波のファクシミリで送られてきた天気図をたくさんつるして熱心に取り組んでおられたお姿が目には浮かぶ。打上げが迫ると、全員打ち合わせ会議で気象の概況について解説をしていただいた。しばしば打上げ延期の通知を出すことにもなり、気象予報官としてご苦労されたようである。

ラムダ(L)ロケットによる人工衛星の打上げに備えた衛星搭載機器の振動試験では、手直しをしながらの作業が深更に及ぶこともあった。そのときは衛星の重量が軌道投入の成否にかかわるということで、剛性を損なわぬ範囲で機器のシャーシに孔を空けて減量するという悲壮なものであった。付き合ってくださいました平尾先生を交え、40号館の振動試験機の脇で議論を重ねたことを覚えている。

今は相模原から撤去された旧熱真空試験装置を駒場に搬入する前、横浜に近い井土ヶ谷の大きな建物で徹夜のテストを行ったときも、平尾先生が陣頭指揮を執られた。その建物は直前まで米軍が使っていて、朝鮮戦争の犠牲者の遺体を故国へ送り出す準備施設であつたと聞かされ、そこでの深夜作業はいまだに強く印象に残っている。この試験装置が駒場に運び込まれてからも、夜を徹しての熱真空試験で一緒したこともある。狭いタラップをまめに上り下りしてデータを記録しておられたお姿は印象的であつた。

衛星の打上げがラムダロケットからミュー(M)ロケットへと引き継がれ、その性能の向上に伴って科学衛星の内容も確実に進化を遂げた。1986年には、76年の周期を持つハレー彗星が回帰するという時機に合わせ、彗星への近接探査という壮大な計画が立てられた。このため宇宙研では、初の人工惑星となる探査機、それを打ち上げるためのロケット、データ送受信のための地上大型アンテナなどの開発が、総力を挙げて推進された。国際的協同観測の枠組みの中で、観測目標を振り分けた2機の探査機のまとめ役という大任を果たされたのは、平尾先生である。「さきがけ」と「すいせい」と名付けられた探査機は、M-3S II-1号機と2号機で1985年の1月と8月にそれぞれ内之浦から打ち上げられた。

これら2機の探査機は1986年2~3月、ソビエト2機、ヨーロッパ連合1機、アメリカ1機の外国勢に伍して、太陽に最接近するハレー彗星を取り囲んで観測を行い、多くの成果を挙げた。成果の発表会はその後、イタリアのパドヴァで開かれた。パドヴァは、ジオットが14世紀に回帰したときのハレー彗星を



ローマ法王パウロ二世とバチカン宮殿にて。中央は当時所長の小田総先生。

描いた壁画の残る町である。まだ東西冷戦の続く中での国際的学術協力を喜ばれて、法王パウロ2世が、パドヴァに集った宇宙機関の関係者をパチカンにお招きくださることになった。そのときの集合写真では、法王のお隣に平尾先生の晴れのお姿がある。

先生はパイプタバコをたしなんでおられたが、お酒もことのほかお好きであった。内之浦では夕食後、平尾先生の定宿で、前田、永田、加藤、宮崎、小田、大林、伊藤などの今は亡き諸先生方との焼酎の席に加えていただいたことが何度かある。その

ような折には、先生がまだお若かったころに噴火した桜島の調査、アメリカのワロップス島におけるロケット実験、イタリアのフィレンツェでの国際会議など、多くの知識を楽しく伝えていただいたことが忘れられない。

あらためて思い起こしてみると、平尾先生とのお付き合いは昼ばかりでなく、結構夜也多かったようである。彼岸では、あの悠揚迫らぬ雰囲気で、昔の仲間と今も盃を重ねておられることであろう。

(はやし・ともなお)

平尾先生の思い出

秋葉鏢二郎

飛翔体による宇宙空間観測草創期からご活躍された、平尾先生が亡くなられ、また一人、時代の証人を失ってしまいました。さすがにペンシルロケット時代にはまだ先生のおおまきはなかったのですが、1960年代に入り、先生のご専門である電離層に到達できる観測ロケットK-8型が登場すると、観測陣の主役となられました。先生の創案による電子密度測定器レゾナンスプローブは多くの観測成果を挙げ、当時としては耳新しい日米科学協力の先駆けとして、NASAのワロップス飛行センターでの国際共同実験にも参加されました。申し訳ありませんが、専門外の筆者には、先生がそこで釣ったウナギで蒲焼を調理し皆に振る舞った、というこぼれ話だけが印象に残っています。

同様に、先生の思い出の多くは、ご業績やご専門についてではなく、先生とのお付き合いの中で、愉快だったことや時々のお出来事などです。愉快な思い出は、長友さんなどが若かりしころの「大隅大海事件」です。それは、内之浦の実験場で、平尾先生に内之浦湾の海水を入れた「大隅大海」という銘柄の焼酎瓶を謹呈して一口飲ませたといういたずらです。晩酌でうっかり口にして、いっぱい食わされた先生が主犯格を人質にして、私のところに謝りに来いという電話が来たのです。そのとき私はま

たく計画を聞き及んでいなかったので、人質は煮て食うなり焼いて食うなりしてくださいとさっぱりとご返答申し上げ、のちのち冷酷非情とのそしりを受けました。もちろんのこと、ユーモアです。

宇宙研ができて間もなく、中国科学院

の招待による1週間ほどの中国周遊は、文化大革命の余韻の残る中での忘れ難い経験でした。一行の団長が先生で、堀内良、廣澤春任の両先生がご一緒に、科学院の手厚いご接待で各地を回りながら、関係者と専門分野の情報交流を重ねました。中国国内事情に疎かった当時としては、すべてが物珍しく、中国料理に舌鼓を打ちながら、平尾先生を囲みそれぞれの感想を話し合ったことを懐かしく思い出します。

先生は宇宙物理学の重鎮でしたが、ご本人は大の工学びいきを自認されており、内之浦のロケット実験には進んで気象班として参加されていました。大の車好きと酒豪は有名でした。実験場にも東京から車で来られることが何度かありました。初期のころの車はポンコツで、バッテリーが上がり気味だったので、よく実験場で充電しておられました。これを見た実験班員は、先生は電気自動車に乗っておられるとか、いやアルコール燃料で走っているとか揶揄したものです。昨今のエコとは程遠い話ですが。

ご定年後も科学衛星の打上げ実験には欠かさず立ち会われ、班員と旧交を温めておられました。ですから、M-V型ロケットの開発が最期を迎えたのを、何より愁えておられました。忘年会でご一緒した折、その話題になり、私見として経済性からの宿命でしょうが固体としては価格はもう1桁下げられるはずだと申し上げましたところ、どうすればそんなに安くできるのか、と真剣に問い詰められました。こちらとしても根拠はありながら確信がなかったので、いずれお話ししますということで、その場の話は終わりました。その後、まとまったお話を先生と交わす機会はありませんでしたが、拙著『奇想天空——ゆめ、うつつ』でその根拠を紹介しておいたのをお読みになったようで、多少納得していただけたのではないかと推察しております。

いま、時代は確実に変わりつつあります。

(あきば・りょうじろう)

ちょっと焼酎が入ってご機嫌の平尾先生(内之浦で)。



平尾さんとともに過ごした 宇宙研の始まりのころ

高柳和夫

宇宙航空研究所が、東京大学附置の航空研究所に宇宙科学（理学および工学）の新設部門が付け加わる形で発足したのは昭和39年（1964年）でした。宇宙理学部門の専任教授・助教授としては、昭和40年春に伊藤さん、玉尾さんが着任、9月に平尾さんが着任されたと、私の手元のメモには記載されています。この年度の終わりに近い昭和41年3月に私が着任、4月には小田さんも着任されました。大林さんの着任はもう1年後になります。

それより何年も前から、電離層をはじめ超高層関係研究者の定期的会合が日本学術会議であり、電離層・地磁気・大気光・太陽活動・宇宙線などの最近のデータを持ち寄り、異常現象の有無、異なった観測項目のデータ間の関連などを議論していました。私は、観測は何もしてい

ませんが、電離層などでの現象を理解する上で必要となる原子分子諸過程についていくらか知っている、当時としては数少ない研究者の一人として、毎回会合に出ていましたので、電離層などの研究者とは顔なじみでした。しかし、平尾さんや大林さん

と個人的なお付き合いはなく、宇宙研に着任して同僚となってから初めて頻繁に接触するようになりました。

何しろ、初期の理学関係では平尾・小田・大林の三氏と私だけが専任教授でしたから、何かあると4人で集まって相談しました（ここに掲載の写真もそのようなときに誰かが撮ってくださったものです）。宇宙科学推進のために選ばれて集まった面々ですから、何事についても意見が大きく分かれるようなことはなく、多くの場合、意見の取りまとめにはあまり時間をかけないで済んだように思います。取りまとめには、年長者で落ち着いた平尾さんが当たりました。

このように宇宙研創成期に協力した4人のうち、大林さん、小田さんに続いて、頑強に見えた平尾さんまで他界され、私一人が残ってしまいました。大変寂しい限りです。

当時の所内にはいろいろな委員会がありましたので、助教授を含めても小人数であった宇宙

理学のメンバーは一人でいくつもの委員会に出席することになり、結構大変でした。平尾さんはいくつもの主要な委員会に宇宙物理学を代表して出ていました。飛翔体による宇宙観測を進めながらのことですから、さぞ大変であったろうと思います。

当時、旧航空研究所からの人たちの中には、ロケット実験やその後が始まった衛星実験のような特別“事業”は大学の研究所でやるべきではないと思っている人がいて、教授会（初期には所員会と呼ばれました）でも「いつになったら飛翔体実験をやめるのですか」といった質問が繰り返し出されるようなありさまで、宇宙科学の推進は決して容易ではありませんでした。

当時教授会などで、自分の意見なのに「皆がそう言っている」というような言い方で何かの提案をする人が多くいました。あるとき平尾さんが、「自分がそう思うなら、他人のこととしないで、私はこう思うと自分の意見をはっきり言いなさい」と発言し、それからは多くの人が自分の意見をそのまま表明するようになりました。

平尾さんは電離層電子の観測を中心に研究を進めていました。私ももともと電離層などに興味を持って宇宙科学にやって来たので、もう少し観測に対応するような理論研究をすべきであったかもしれませんが、足原修さんに協力してもらって電離層の非熱的電子のエネルギー分布のモデル計算をしたほかは、あまり平尾さんのお仕事と直結する研究はできずに終わりました。

宇宙物理学は当初大変小さなグループでしたが、そのために一つの家族のようで、大学院学生諸君も含め、しばしばハイキングに出掛けました。私も、小さかった子どもを連れて毎回参加していました。また、年末に盛大に忘年会をやったことなど、今も昨日のこのように思い出されます。

平尾さんについてはいい思い出ばかりとりたいところですが、一つだけネガティブな点がありました。それは、平尾さんを含め宇宙科学の二、三の人たちが大変な愛煙家だったということです。教授会では私たちの席の周辺ではいつも厚い煙の層が漂っていました。これにはだいぶ迷惑をしました。今ではちょっと考えられないことでしょう。今ごろは、先に亡くなった伊藤さんなどと、あの世でタバコをふかしながら、数々のロケット・衛星の実験の話などをしていただろうことでしょう。ご冥福をお祈り致します。

（たかやなぎ・かずお）



四者会談の様子。右から小田稔、大林辰蔵、平尾邦雄の三先生、左は筆者（昭和42年秋）。

平尾先生を偲んで

清水幹夫

誰もお書きになると思いますが、先生の豪快な笑い声は聞いた人の精神面にも良かったようで、これが聞けなくなったことはずいぶん寂しい限りです。幸いなことに、先生が怒っている事態に接したことは一度もありませんでした。私の知る限り、まさに鉄人という言葉が当てはまる健康状態に思えたので、訃報に接しぼうぜんとなりました。一方、大変細やかな神経の持ち主で、仕事上は細部の欠陥を見落とさず、対応された衛星が一つも失敗しなかったことは驚嘆に値します。ハレー彗星探査のように、それ以前からワンステップ踏み出す難しい深宇宙ミッションが無事にやり遂げられたのも、先生の緻密な采配があったからです。

私が東京大学宇宙航空研究所に移ったころは、平尾、高柳の二教授に加えて、さらに小田、大林教授が赴任されたという時期でした(もうそのうち、高柳先生を除くお三方は故人となられました。何と月日は早いものです)。直接惑星などを研究されている先生がおられず、月ミッションが始まってから盛んに議論を始められた永田先生、国立天文台の畑中先生(お二人は京都大学の前田先生、名古屋大学の早川先生とともに宇宙研の創設者ですが)の研究と少し話が重なっていたくらいで、後年、高柳先生と永田先生が月・惑星シンポジウムを京大基礎物理学研究所の太陽系起源シンポジウムを引き継いで始められるまで、アメリカから研究の種を仕入れるしかありませんでした。この流れの中では平尾先生と深い付き合いは生まれず、ハレー彗星探査機に関連した鹿児島行きが始まるまでは、宇宙観測の先輩として遠くから眺めることが多かった感じです。

平尾先生がハレー彗星ミッションに乗り出さ

れてからは、もちろん行動を共にすることが増えました。そばにいるといろいろと学べることが多く、衛星が小さいので観測候補機器をやむを得ず二つの衛星に分割して搭載するとした際の決断とか、工学の方々と擦り合わせや予算の付け方とか、理論しかやっていなかった私にはずいぶん新鮮な経験となりました。

先生とはこのミッションの後始末を含めて何度もあちこちを回りましたが、二人だけのヤジキタ道中でNASAのヘッドクォーターを訪れたときのことが一番印象に残っています。昔のことなので細かいことは覚えていないのですが、まず先にアメリカ西海岸のJPLなどを訪れた際、レンタカーで安宿屋を探しながら、何とか炊事器具付きのモテルに駆け込みました。せっかく器具にも金を払っているのだからステーキでも焼いて食べようということになり、近くのスーパーに行って肉や野菜を買い込みました。私も昔ロンドンで自炊をした経験があり、レアやミディアムの焼き方ぐらいは心得ていたので早速肉を焼こうとしましたが、待て待てと押し止められ、先生は何とタマネギ、ニンジンと切り刻み肉の上に乗せてマリネをつくり始めました。芋焼酎をがぶ飲みして議論活発といった印象が強かった先生の知られざるグルメの一面を見て驚いた次第でした。NASAにワシントンのホテルを手配させたので、用心して旅費を節約したにもかかわらず、NASAのレートでも100ドル近い場所になって節約などすっ飛んだのもこのときです。さらに、私をJPLに招いてくれたキャプタン教授が本部を訪れてくださって、久しぶりにお会いすることもできました。それやこれやで、この米国訪問が強く記憶にとどめられています。その後もイタリア・パドヴァでの国際ミッション打ち止めの会や、その後の法王庁訪問などいろいろとあったのですが、先生だけと一緒のチャンスはそれっきり逸しました。

このところ先生とお会いするチャンスがなく、2月半ばに先生の訃報に接したときは、100歳ぐらいまでお元気でおられるのではないかと考えていただけに、不意を突かれた感じでした。しかし考えてみれば長い間、いくつものきつい衛星絡みのお仕事を続けられており、常人より疲労が奥深くたまっておられたのかもしれない。相模原キャンパスA棟(研究・管理棟)の吹き抜けの中庭には、先生名残のハレー彗星紫外線撮像が印画されています。これを見て先生の思い出に浸りたいと考えています。合掌。

(しみず・みきお)

ハレー彗星探査機「すいせい」のデータを検討する平尾、伊藤両先生と筆者(左から)。



磁気シールドルーム建設と 平尾先生

鶴田浩一郎

宇宙研時代、私は平尾先生の研究室に属していたわけではありませんが、平尾先生のもとでいくつかの仕事を一緒にする機会がありました。内之浦の気象班の仕事と相模原の磁気シールドルーム建設が特に印象に残っています。いろいろエピソードの多い気象班の仕事は別の機会に譲るとして、ここではあまり知られていない平尾先生の功績、磁気シールドルーム建設の紹介をしたいと思います。

磁気シールドルームは、相模原キャンパスC棟（飛翔体環境試験棟）の一面にある直径8mの球形の構造物です。アルミ2層とパーマロイ3層の球殻で覆われた内部では、地球磁場は約5000分の1まで遮蔽され、ほぼ太陽風内の磁場強度になります。

磁気シールドルーム建設が始まった1983年当時、宇宙研では1985年に予定されていたハレー彗星探査のために2機の探査機「さきがけ」と「すいせい」を開発中でした。「さきがけ」には磁場計測器が搭載され、太陽風の中で太陽風磁場の測定を行うことが予定されていました。太陽風の磁場は約5～10ナノテスラと弱く、地上の強い磁場ノイズの中では計測器の性能を確かめることが難しいと考えられていました。特に、探査機自身が出す磁場ノイズの影響を調べるには、磁気シールドルームをつくって磁場ノイズのない空間を実現する必要がありました。

ハレー彗星探査計画の大ボスでもあった平尾先生の最初の構想は、シールドルームに探査機をそっくり入れて探査機が出す磁場ノイズをなるべく実際に近い形で計測できるようにしたい、というものでした。そのためには、衛星のサイズやセンサーの突起などを考慮すると、一辺3m程

度の立方体が入る空間の磁場を遮蔽する必要があります。

当初は製作が容易でたぶん制作費も安く上がる、直方体の磁気シールドルームを皆考えていました。しかし、検討していくと、なかなか要求を満たす答えが出てこないことが分かりました。特に、遮蔽できる空間を大きく取れないことが問題でした。検討の場にいた皆の頭の中には最も理想的な形状、球殻による遮蔽が比較の対照として浮かんでいました。しかし、製作の難しさを考えて、誰もそのことを口にできないでいました。そんな中で、平尾先生が「やはり、球かな」とつぶやかれた。このつぶやきを契機に、球殻によるシールドルームの検討が急ピッチで進むことになりました。

球殻によるシールドルームの建設は、遮蔽材を壁に貼っていけばよい長方形の磁気シールドルームよりはるかに大変であることが予想されました。特に、磁場の遮蔽材であるパーマロイは曲げや外力に敏感で、球殻に加工していくと遮蔽能力が下がってしまう性質があります。実際には、球殻の一部として加工され、搬入された遮蔽材を調整の後、再度、仙台にある工場に持ち帰り再処理をして再び送り返すという手間を入れることにより、この問題を解決しました。アルミの球殻への貼り付け力が遮蔽材にかからないように注意しながら行う必要があり、現場のワークマンシップが結果に大きく影響する工事でした。平尾先生は、現場で技術者にいろいろ質問しながらご自分でも細かい工程を評価していらっしやうで、壁の間の狭い空間をのぞき込んでおられる姿が印象的でした。

この磁気シールドルームの性能を決めたもう一つの要因は、主担当メーカーの東北金属工業と技術者の清野氏の熱意だったと思っています。細心の注意をもって組み立てられた磁気シールドルームの出来上がりの良さの目安として壁材の実効透磁率がありますが、その値は約4万で、予想より3割ほど高くなっていました。これは、遮蔽材の貼り付けにおいて、つなぎの部分の加工など作業者の質の高さを表しています。球形シールドルームという初めての試みに技術者の熱意を集中させることができたのは、平尾先生の持っている不思議なオーラの所為だと思っています。オーラの正体はよく分かりませんが、くわえパイプの先生と皆であれこれアイデアを出し合った1年弱の磁気シールドルーム建設は、私にとっても有意義で、楽しく忘れ難い経験でありました。（つるだ・こういちろう）

ハレー彗星探査機「さきがけ」の磁気シールドルームへの搬入を見守る平尾先生。



平尾邦雄先生のご逝去を悼む

松尾弘毅

なかなか文章がまとまりません。思い出が多過ぎるのだと気が付きました。私の宇宙研での黄金の日々は、先生のお顔、お声と分かち難く結び付いています。

恒例の『ISASニュース』の新年会を、先生のご都合を伺って準備している最中のご入院でした。

1981年、我々が宇宙科学研究所という新天地を得ると同時に、宇宙科学の推進にかかわる我々の活動を自ら紹介するという先生の構想に沿って、『ISASニュース』が創刊されました。以来今日まで立派にその役割を果たし、多くの賛辞が寄せられました。「この種の広報紙に革命をもたらすもの」と書いてくださった科学館もありましたし、「編集部としての敬意を代表してお伝えします」とおっしゃってくださった論説委員の方もいらっしゃいました。私も創刊以来かかわってまいりましたが、一種治外法権的な雰囲気の中での編集委員会は、誠に楽しいものでした。背景にある豊富な素材に加えて宇宙研の気分が色濃く反映されていたことが、評価につながったのだと思います。

手元にあるかつての本誌に「……内外の諸役職の執行とあわせて先生は多忙を極められたはずであります。本ニュースに傾けられた先生の情熱は並々ならぬものがあり、万難を排して編集委員会には出席されたものです。過ぐる2月19日工学的諸試験を終えた「さきがけ」は搭載のアンテナを伸展して観測準備に入りました。これに関連して、当初伸展は18日の予定だったのを編集委員会と重なったため1日延期になったとの、昨夏の探査機運用会議で先生が観測の早期開始の必要性を説かれたことを記憶しております私にとっては誤報としか言いようのない噂が流れたほどです」とありますが、これは誤報とも言い切れません。実はこれは1985年3月号に掲載された私の「平尾邦雄先生のご退官を惜しむ」の一節なのですが、少し手直しすればまた見えそうだと、ご当人と大笑いしたのを覚

えております。

初めてお会いしたころ、片や宇宙物理学の御三家筆頭ともいべき大先生で、片や私は工学の末席を汚す身でしたから距離に不足はなかったのですが、多くの場面でご一緒することになりました。建物が散在する内之浦の発射場で、先生も私たち工学の悪童どもも、コントロールセンターを本拠地にしていました。すべての実験に気象班として参加された先生は、特に天候が微妙になると重きをなされました。天気図から読み起こして懇切に解説してくださるのですが、降るのか降らないのか、素人にはなかなか分かりにくい玄妙なお話でした。待ち時間にはスクラブルにうつつを抜かしました。「相手が少なくとも自分の半分の能力を有しているという前提で、私の戦略は成り立っています。その前提が崩れると、どう対応してよいか分かりません」というのが私の言い分でした。

お酒をこよなく愛され、夜はカラオケということにもなります。レポートリーはお上手な順に、「瀬戸の花嫁」「君恋し」「別れのブルース」でした。

宇宙開発草創期以来の先生のご業績については、多くの方がきちんと述べられると思います。私との関係で特に一つ挙げるならば、我が国初の惑星間飛行である「ハレー彗星探査計画」は、先生が牽引されました。近年の小惑星探査機「はやぶさ」の活躍、月周回衛星「かぐや」の成果につながる非常に大きな一歩でした。日欧ソ米の協調による成果を報告するため、4極の代表団が法王様に拝謁する運びになりました。その当日、ローマでのことです。ほかの皆は先に街に出払って、取り残された西村敏充先生ともども3人で市内の日本料理屋で昼食ということになりました。3人とも、寺も城も一軒見れば十分というくちです。お二人とも日本酒に大変強い未練をお持ちでしたが、私が至極まともな意見を申し上げて事なきを得ました。

宇宙研らしさとは何かをあらためて確認する必要に迫られているように思える今、理工一体、理工連携を本当に体現していらした先生が逝かれました。「一度Mロケット打上げの実験主任をしてみたかった」とおっしゃっていた先生、ひそかに「俺ならできる」と思っていたのかもしれない。温顔を偲びつつ、心からご冥福をお祈り致します。

(まつお・ひろき)

ハレー彗星探査機「すいせい」打上げに成功して。左は当時所長の小田総先生。



平尾先生との 初仕事の思い出

上杉邦憲

日本初の人工衛星「おおすみ」の打上げに成功した昭和45年(1970年)ごろだったと思いますが、駒場に新設された45号館の1階会議室に火薬のにおいと煙が立ち込めたことがありました。米国のH社が火工品の売り込みに来て、デモンストレーションでワイヤカッターを作動させたためでした。

当時、将来の衛星のスピンを簡便に落とす手段としてヨーヨー・デスピンの検討をしていた私は、そのワイヤを切断する部品としてのカッターを必要としていたのですが、このデモを見ていた平尾先生が一言、「こりゃ使えん。こんな汚いガスが出るんじゃ観測機器が汚れて駄目だ!」

そこでガス漏れゼロで作動失敗のないワイヤカッターを国内開発することとなり、これが平尾先生との仕事上のお付き合いの始まりでした。

ワイヤカッターとは、直径10mm、長さ50mmほどのアルミの筒の中に火薬を仕込み、その力で先に歯の付いたピストンを動かして、金属製ワイヤや棒を切断するというものです。小さな薬室の中で発火した火薬の圧力は1000気圧にも達し、かつ可動部があるため、ガス漏れをゼロにするには結構苦勞しました。

日本油脂(現 日油技研工業)技術者の努力でようやくできたワイヤカッターを平尾先生の御前に披露することになりましたが、漏れゼロを証明する最も簡便な方法として、バケツに張った水の中でカッターを作動させることにしました。小さな泡一つでも出れば駄目ということで緊張しましたが、幸いうまくいき、平尾先生からは「屋根屋の禪」(実は「禪」ではなく放送禁止用語)とのお褒めをちょうだいしました(その意は、見上げたもんだよ屋根屋の禪)。

脱線しますが、当時すでに長老(といっても皆さん40代後半)だった平尾先生や大林先生は、上記の江戸言葉やら何やら分からない言い回し

をよくご存知で、「蒟蒻の木登り」(震え上がる)とか「巡査の引越し」(官服(感服)のほかはない)などをご教授くださいました。

さて、ワイヤカッターは一応できたのですが、平尾先生の次なる要求は「衛星で使うのに単発ではまずいので、冗長性を持たせる」でした。カッターはその性質上ただ二つ並べてどちらかが作動すればよいというわけにはいかないため、薬室二つを組み合わせ、歯とアンビルを向き合わせて作動させる形式のものを開発しようと苦勞しましたが、結局これはものになりませんでした。

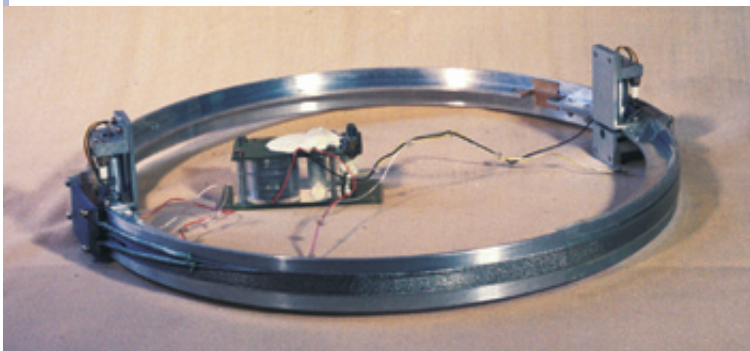
平尾先生には「カッターはシングルでも点火用電橋は冗長になっており、火薬が作動すれば歯が動かないことはないから」と強弁してお認めいただき、昭和46年我が国初のヨーヨー・デスピナー実験に供することができました。写真はそのK-10型ロケット7号機に搭載したヨーヨー・デスピナーです。幸いこの実験は成功しましたが、その後、衛星のヨーヨーや太陽電池パドル固縛解除にカッターを用いる際には、冗長性を持たせるよう使い方の工夫をしました。

かくも厳しく親愛なるご指導で蒟蒻の木登りの我々は、その後スクラブルゲームで平尾先生をカモにしたり、「大隅大海」と名付けた海水入り芋焼酎を差し入れてご苦勞をお慰めしたりしたものです。なお、鹿児島宇宙空間観測所(KSC)のコントロールセンターでの昼食のラーメンに、魚肉ソーセージと色も形もそっくりのゴムパッキンを入れて平尾先生にお出したのは私ではありません。もっとも驚いたことに、それを「ん? 少し硬いな」とおっしゃりながら平らげられたのは、まったく巡査の引越でした。

生涯タバコを放さず、ゴムパッキンを消化する強力な胃の持ち主の平尾先生は、今思うと「おおすみ」から「ひので」まで宇宙研のすべての衛星打上げに立ち会われた唯一あるいは数少ない一人ではないでしょうか。「さきがけ」が上がり「すいせい」がハレー彗星に向かう前にご引退になった後も、衛星打上げのときは必ず内之浦へお出ましになり、福之家で丹前をはだけ、焼酎を前にご機嫌だった姿を忘れることができません。

平尾先生、長い間のご教授ありがとうございました。ご冥福をお祈り致します。

(うえずぎ・くにのり)



平尾先生の要求で開発したヨーヨー・デスピナー (K-10-7号機搭載)。

平尾先生の思い出

井上浩三郎

昨年の宇宙研の一般公開で、お孫さんとお見えになっていた折にごあいさつしたのが、平尾邦雄先生との最後となってしまいました。

顧みますと、先生に初めてお目にかかったのは、私が初めて内之浦の観測ロケット実験に、テレメータ班として参加した昭和38年だったと記憶しております。先生は、郵政省電波研究所から実験に参加されていました。観測ロケットもK-9M型が主力になるときでした。ロケットの頭胴部に組み付ける観測装置を入念に時間をかけてチェックしておられた先生の姿が思い出されます。その後、先生は東京大学宇宙航空研究所に移られ、多数の観測ロケットによる、電離層をはじめとする地球上層の観測で多くの科学的な成果を挙げられました。日本初の人工衛星「おおすみ」成功の後、Mロケットによる科学衛星で

は、衛星主任を務められた第1号科学衛星「しんせい」、超高層大気観測衛星「たいよう」、オーロラ観測衛星「きょっこう」で、先生とご一緒に仕事をさせていただきました。「しんせい」では電離層を直接観測して初めて南米大陸付近の異常な電離を見だし、「たいよう」で詳細に観測されました。「きょっこう」

では世界で初めて紫外線によるオーロラの全体像を同時にとらえ、素晴らしい成果を挙げられました。

初期の衛星追跡は、内之浦上空に回ってくるすべての衛星パスを、昼夜問わず受信していました。そのため追跡班は、実験場の建物の片隅にボンボンベッド(簡易ベッド)を持ち込み、大学、メーカー問わず、寝泊まりしていました。受信した観測データを見ながら、その場で次に打つ衛星コマンドを決めるという、今では考えられない衛星運用で、まさに24時間体制でした。先生は陣頭指揮を執られていましたが、そこで「トラッキング数え歌」が生まれました。次に打つコマンドがな

かなか決まらず、また、決めたコマンドが次の可視時間の寸前で変わることもあり、「レボ9や〜レボ9や〜、くるくる変わるは平尾ちゃん〜平尾ちゃん、おかげでこまるはコマンドマン〜コマンドマン」と、追跡班のあるメンバーが親しみを込め、皮肉った歌詞があります。先生が試行錯誤しながら、いかにしたら正常に衛星を運用し、最良のデータが得られるか、ぎりぎりまで考えて、苦心してコマンドを決めておられたのでしょう。寝食を共にし、くたくたになりながら、運用終了後には先生をはじめ追跡メンバーで酒を酌み交わしたことが、楽しい思い出として今よみがえります。

また、先生の思い出の中で、キセルでタバコを吸われている姿と、芋焼酎をおいしそうに飲まれている姿も、印象的に脳裏に残っています。「内之浦」をこよなく愛され、実験期間中の定宿では、いつも鹿児島特産の「芋焼酎」をたしなんでおられた、と伺いました。1日の疲れを癒すため、そして、次の日の活力にもなっておられたのでしょう。また、故伊藤富造先生がおみやげに買ってこられた「アクアビット」という、日本の焼酎に似た北欧のお酒を大変気に入っておられました。あるとき宇宙研でたまたま先生のお部屋に伺ったとき、近々出張で北欧に行く予定だった私は、「買ってきてください」と頼まれました。残念ながら、本場では買えず、帰りに寄った「ドイツ(?)のアクアビット」を買ってきましたが、本場の味とは微妙に違うのを感知されたようで、相すまなく思ったことが思い出されます。

宇宙研が総力を挙げ、理工一体となって取り組んだハレー彗星ミッションでは、先生は日本で初めて地球引力圏を脱出したハレー探査機「さきがけ」「すいせい」のプロジェクトマネージャーを務められました。常に現場を大事にされ、我々衛星班の先頭に立たれ、不具合を一つ一つ解決しながら成功へ導かれました。

思い出は尽きませんが、宇宙研の観測ロケットを育てられ、初期の科学衛星の基礎を築かれた平尾先生、キセルを片手にタバコを愛されたお姿、にこやかに、時には豪快に笑われていたそのお姿には、もうお目にかかることもできなくなりました。寂しい限りです。

心から先生のご冥福をお祈り致します。

(いのうえ・こうざぶろう)



衛星打上げ成功後、満面に笑みを浮かべて、林友直先生(左)と歓談される平尾先生。

平尾先生の思い出

三宅多美子

一昨年くらいから先生の米寿のお祝いを今年の5月ごろにしたいとの声が、超高層大気衛星「たいよう」のメンバーから上がっていたのに、こんなに急にお亡くなりになるとは。私たち先生の研究室の者は、先生は亡くならないものと思っていました。

先生と私とのご縁は昭和40年9月から始まります。大学の就職係から紹介され面接に訪れたとき、私の成績証明書の封を切りながら「英語は？ 数学は？ 微分・積分は？」と矢継ぎ早にお尋ねになり、私は絶句しました。その後、人事掛から「明日から来られますか？」と連絡がありました。採用後には先生は毎月内之浦出張で、その間、前任の郵政省電波研究所からの荷物と国立天文台の宮地政司先生からのCOSPAR（宇宙空間研究委員会）の書類を仕分けしながらどんな研究をされているのか少し理解し、暮れから正月になってやっとゆっくりお話しして、実務的で飾り気のない先生と分かりました。先生の出張中は玉尾、伊藤両先生の仕事をしていました。宇宙理学はこのころ10人ぐらいでした。現在も使われているか分かりませんが「ロケット観測搭載機器実験申込書」「基礎開発費申込書」その他、研究会やシンポジウムの講演申込書などは、先生の発案のものを私が清書して湿式の複写機で100枚、200枚と複写していました。その都度「すみませんー、これ100枚、出来上がったら観測事業

に持って行って」とおっしゃっていました。2年ほどして研究室も人員が増え、親睦旅行で千葉の行川アイランドへ行きました。民宿へ泊まりましたが皆で寝坊し、民宿のお母さんが「運命」を大音量でかけて、それで全員起こされました。また、ある土曜日の午後、河島研とソフトボールの試合をし、先生は1塁を守られました。打順は忘れましたが、実況すると、「ピッチャー佐々木進、投げました。打者平尾、打ちました。ライト前ヒットです。あっ、バッターランナー1塁でアウト！ こんなこと珍しいですね」となりました。先生はその後、犬を飼うよういろいろな方から勧められていましたが、庭が荒れるからと、生き物を飼ってみようとはしませんでした。また、小

田先生が着任されると、「ボストンではスケートをしていただけど、この辺でスケートできるところない？」ということで、夕方正門の前に集まり大勢で代々木のスケートリンクへ行きました。みな無事に滑ってから公園通りの喫茶店でお茶を飲んで解散。何回か行きました。

忙しくなってそんなこともなくなり、昼休みに45号館玄関横でバレーボールをしていたときのこと。先生が大阪の学会の後、乗ってお帰りになった中古パブリカが止まっていて、球が当たったら塗料がガパっとはげ落ちてしまいました。翌日、松山さんが油絵具の似た色を塗ってあげたら大変うれしそうでした。その車の天井には、ガムテープが5列も貼ってありました。先生が外国出張からお帰りになるころ、研究室の誰かがバッテリーを充電して、乗れるように準備しておきます。充電ができたというので私が試運転してみたら、駒場の研究所の緩い坂でブレーキが効きません。ブレーキが効かないと先生にお伝えしたら、コツがあるから危なくないとおっしゃる。その後で「実験室に扇風機を」と言われたので大型スタンド式を買いました。荷が着いたらご覧になって「小さいのでよかったのに、その分実験室の消耗品が買えるのに」と、しかれてしまいました。

ある日の昼近く、先生が胸ポケットから写真らしきものを出して眺めてはしまつて、また見ていらつしゃる。先生のそばに行つてのぞいてみたらタオルに横たわる赤ちゃんで、あまりにも先生によく似ているので思わず「わー、利かなそうところが先生にそっくり」と言つてしまいました。隣の輪講室でお昼を一緒にしているみんなに「先生のお孫さんの写真見せてもらった」と話すと、すぐに写真は皆の間を一周してしまい、「もうおじいちゃんですね」と冷やかされていきました。すると先生は、「孫と酒が飲めるまで元気でいたい」とおっしゃり、「あと20年なら大丈夫ですよ」と皆から言われ、「まあね」とうれしそうでした。お葬式の時、あの赤ちゃんはどなただろうと、私はご遺族の席を思わず見回していました。

先生のところで20年も仕事を続けることができました。「研究する者は素人の言うことも一理あるから聞かなければいけない」。あるときふとおっしゃった、この言葉を伺い「仕事を続けよう」と思いました。そして、先生のお人柄と、人的環境が良かったから。

何も分からない私に社会人とはこうあるべきもの、とお手本を見せていただき、教育してくださいました。思い出すことは尽きず、紙面は足りません。先生が定年になられて24年余り、お亡くなりになって9ヶ月、今はあらためて感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。（みやけ・たみこ）



COSPAR東京大会の寄せ書き。左下の平尾先生のコメントに注目——「御苦労様でした。よい人生修行だったと思います。特にお嬢さん方にとっては。」

平尾先生と内之浦の人々

下村和隆

平尾先生との出会い

私たちのグループは種々の設備の保全を担当しており、放送設備もその一つでした。それが、たびたびトラブルを起こしました。修理をしようと回路図を広げたものの故障箇所を特定できずにいる私に、回路図を見ながら優しくヒントを与えて教えてくださったことを記憶しています。このようなことが度重なり、設備の長所・短所を把握でき、その後の改修改善につながっていきました。それが先生との最初の出会いだのように思います。

実験主任・平尾先生と鹿児島弁

ある時期、観測ロケットの打上げを内之浦の職員主体で実施しようということになりました。実験主任／平尾先生、管制班／下村、ロケット・ランチャー班／池田、レーダー班／豊留、テレメーター班／日高、点火管制班／中部・東。作業の指示・報告は、このメンバーで行います。鹿児島弁を理解できないのは、平尾先生と中部さんです。作業が順調な間は、鹿児島なまりながら標準語らしく報告が来ます。

実験班員全体への作業状況報告・指示は、放送で私が行います。「間もなく動作チェックを始めます」。すると日高君から「下村さん、ねっかいそろわんがな、いっとまっおいやいな」。「よお、わかった、だいがこんとけ、放送で、よっだすっで」「おう、そげんしっくれっみゃい」。私が「PIの〇〇さん、至急テレメーターセンターへお越しください。動作チェックを始めます」と放送。

打上げ前の搭載機器動作チェックは正常に終了し、いよいよロケットランチャー班の出番です。「ロケットランチャー班は発射角の設定作業に入ります」という放送での作業指示に対して、池田さんから「下村君、いっとまっおいやいな、ゆあっが、ちっと、たらんごっあっで、いましらべっおっで」。「じかんなどいぐらい、かかいごっあいや」。間もなくして「下村君、正常になったで、セットすっでな、上下角は79度ちゃどが」「お

う、ちゃっど」。私が「ランチャー班は修復を完了しました。ただいまより発射角の設定作業に入ります。上下角は79度に設定します」と放送。

ここで平尾先生が「下村君、途中の状況がつかめるよう、指令電話での話は標準語でできないか」。「先生、電話で話をするとき、相手の顔を思い浮かべながら話をするものですから、どうしても常時使っている鹿児島弁になってしまいます。すみません。平尾先生とは、その後もたびたびこのようなやりとりがありましたが、内之浦の職員が徐々にスケジュール進行に慣れ、聞き役の平尾先生も鹿児島弁を少しずつ理解されるようになったのではないかと思います。

軍艦島での釣り

実験期間中の休日は、町を散策するぐらいで、実験班員は退屈な一日を過ごしておられたように思います。ある休日前夜、私たちのグループは夜釣りに出掛けようという話になり、平尾先生も同行されることになりました。「下村君、場所はどこだ。遠くはないのか」「川原瀬の軍艦島で、この辺りの釣り場では一番楽で、近いところだ」。総勢6～7人、それぞれが懐中電灯やヘッドライトで足下を照らしながら軍艦島を目指しました。途中、獣道に近いようなところがあり、また島に渡るには、足元を濡らして磯を跳ばなければなりません。ようやく無事に島に到着。しかし、2～3時間過ぎても釣果が挙がりません。ジャコばかりです。「先生、帰りましょうか」。さあ帰りが大変です。なだらかな下りのようだった坂が、大変な急勾配の登り坂に思えるのです。翌日先生に言われました。「下村君、私をだましたな」「だましていませんよ」「君が一番楽な場所って言っただろう」「軍艦島が、夜釣りでは一番楽で安全な場所です」。釣果がジャコばかりで、なおいっそうきつく感じられたようです。その後、釣りの話をして同行しようとはおっしゃいませんでした。

常宿「福之家」での平尾先生

先生の常宿は「福之家」でした。当時宇宙研の酒豪が多数同宿されていたように思います。皆さん陽気でした。私は「福之家」には、おふくろさんがご健在のところからかわいがってもらっていたこともあり、よく出入りしていました。夕食が終わると「ニューロケット」でのカラオケになります。先生には歌詞カードが一冊渡してあります。「先生、歌詞カードを貸してください」。受け取ってみると7～8ページ折りが付いています。先生のレポートリーです。私が歌いたい「夜霧のブルース」にも折りが付けてあり、とうとう遠慮して歌えませんでした。懐メロが大好きな先生でした。

ご冥福をお祈り致します。合掌。

(しもむら・かずたか)

内之浦コントロールセンターの管制卓で（2006年2月）。左は筆者。「この3月で私も管制卓とともに最後です。一緒に写っていただけますか」とお願いして撮影。平尾先生も最後の来所になってしまった。



ありがとうございました、 平尾邦雄先生

的川泰宣

1980年の暮れのこと。目黒区駒場の東京大学宇宙航空研究所56号館2階にいた私に電話がかかってきました。「ちょっと相談があるんだけど……」。平尾先生です。45号館の入り口を入ると、先生の大きな笑いが響いてきたので迎いを回りましたが、姿がありません。それはそうでしょう。先生の居室は4階ですから。それにしても臨場感あふれる豪快な笑い。

「来年はいよいよ宇宙航空研究所から宇宙科学研究所に改組される。ついては新研究所のニュースを出してはどうかと考えたんだけど、どう思う？」とのことでした。即座に賛意を表して、「先生が編集長をされるとして、私が工学を受け持つとすれば、理学の若手が誰か必要ですね。牧島くんに入ってもらいましょうか」ということで、X線の牧島一夫君を呼んで、3人でわいわい基本方針を話し合いました。

創刊号を出したときに秋葉鏝二郎先生が、「3号くらいまでもつかないかな？」と冷やかされましたが、こちらはまったくそんな心配はしておらず、鼻で笑った記憶があります。これが『ISASニュース』の発端です。

20歳も年上の人に対して失礼だとは思いますが、平尾先生とはウマが合いました。

・「笑い袋」というものがあって、ギュッと握

ると「わっはっは」と平尾先生そっくりの笑い声。ある観測ロケットの打上げが成功したとき、「実験主任の喜びの声をお届けします」というわけで、内之浦で場内放送に乗せて流したことがありましたね——そのうれしそうで磊落な笑い

- ・スクラブルで“PILL”という語をつくりたくても手元に“L”が1枚しかないと、“PIL”が正しいスペルだと本気で思えてくる欲の皮
- ・コンテナに入れるピンクの細長いパッキンをハムと間違えて食べてしまう食欲
- ・それでも痛くならない丈夫な胃腸

・現役を退かれてからも、衛星の打上げの際には必ず内之浦に来てくださいました。そのいびきを恐れて皆さんが相部屋を敬遠されたので、私がいつも一緒にしました。私も太ってからはいびきが大きいという噂が立っていたのですが、一晩寝てから平尾先生、「おまえさんは、まだいびきが片道だな。オレのように往復のいびきをかかなければ一人前とはいえない」——そのプライド

・久しぶりで内之浦を訪れると、仲良しの牧写真館の主のもとを、時間がなくても必ず訪問されました——その義理堅さ

・外れても後れても、伴奏曲が終わっても、最後まで歌い切る「瀬戸の花嫁」

・ある日、大林辰蔵先生がおっしゃいました。「文部省に予算の掛け合いに行くときはね、筋の通った要求をするときは小田先生に行ってもらうんだけど、論理的には無理そうな要求を出すときは平尾先生でないと駄目なんだよ」——その強弁

・ワイワイと冗談ばかり言い合っているときに、期待に満ちたまなざしで話し手の顔を見つめる、その少年のような瞳の輝き

・40歳でタバコをやめた私に対して「一度始めたものをやめるなんて意志が弱い」とたしなめられた屁理屈

・内之浦のチーフ会議では、気象班を率いる先生は不可欠でした。それにしても、雨が降るのか晴れるのか、結局ははっきりしないことが多かったですね——名調子の天気予想

・「三州」パチンコにとって、平尾先生は上得意でした。先生が還暦を迎えられたとき、パチンコの玉を500個プレゼントしました。あっという間の500個でした——そのワザ

……キリがありませんが、このような平尾先生のすべてのシーンが大好きでした。

韓国に衛星研究センターが設立されたときに、先生と二人一緒に招待されたことがあります。あの先生ご夫妻と歩いた百済の都ブヨ（扶余）を、2009年のIAC（国際宇宙会議）のときに、思い出をかみしめながら歩きました。かつて二人で見上げたある寺の大門にたたずんでいたら、もう永遠にお会いできないという想いが、懐かしさとともに込み上げて、涙がとめどなくあふれてきました。また一緒に呑みたいですねえ、平尾先生！（まがわ・やすのり）



赤外線天文衛星「あかり」打上げのときに。左は筆者。

ISAS ニュース No.345 2009.12 ISSN 0285-2861

発行／独立行政法人 宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究本部

〒229-8510 神奈川県相模原市由野台 3-1-1 TEL: 042-759-8008

本ニュースは、インターネット (<http://www.isas.jaxa.jp/>) でもご覧いただけます。

● デザイン／株式会社デザインコンビビア 制作協力／有限会社フォトンクリエイト

●

●

●

* 本誌は再生紙（古紙 100%）、大豆インキを使用しています。

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOYINK™
Trademark of American Soybean Association